

二月十五日は、涅槃会です。お釈迦さまが、インドのクシナガラクシナガラの郊外、沙羅双樹しゃらそうじゆのもとで八十歳のご生涯を閉じられた日にちな因み、多くのお寺ではその様子を描いた涅槃図ねはんずを掛けて、法要を営いとなみます。

お釈迦さまは、三十五歳でおさとりを開かれてから四十五年間の長きにわたって、自らの足で人々を救う教えを多くの土地で説き弘められました。その最後の教えの旅路を記した『大般涅槃経（だいはつねはんぎょう）』というお経があります。

そのお経によると、マガダ国のラージャガハを、侍者アーナンダと共に出発されたお釈迦さまは生まれ故郷のルンビニーに向かいましたが、その途中の村で、体に激しい痛みを感じるようになりました。幸いに回復しましたが、教団の将来を思われたのでしょうか、お釈迦さまは、

自らみすかを島しま（洲）とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法ほうを島（洲）とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。

と、アーナンダに示します。自分が亡くなった後も、弟子たちが自らりつを律し、生前に説いた多くの教えをよ拠り所として修行を行って欲しい、という願いであったのでしよう。

しかしその後、クシナガラで沙羅双樹しゃらそうじゆのもとに至り、頭を北に、右脇わきを下にして横になり、お釈迦さまはお亡くなりになるのです。

その際、アーナンダをそばはじめ傍にいた多くの弟子たちは両腕をつき出して泣き、砕かれた岩のように打ち倒れ、転げ回ったと伝えられています。

その様子が描かれているものが涅槃図です。お釈迦さまのご葬儀を取り仕切ることになる長ちようろう老のアヌルッダが、泣き崩れるアーナンダをはげ支え励まし、四本の沙羅双樹しゃらそうじゆの右上から、亡き母の摩耶夫人まやふじんが雲に乗って飛来し、多くの人々と共にさまざまな動物・鳥・虫たちが悲しみにくれているという、伝説が描き込まれた絵図です。

大いなる真理にめざめ、人々を救う多くの教えをお示しになり、お亡くなりになられたお釈迦さまをしの偲び、私たちも同じ人間として、遺のこされた教えを拠り所として、自分自身が歩むべき道、すなわち、生き方を見つめる機会としたいものです。